故国を後にして(7)

知りてなお投げむ一塊(かい)の石

モーレンカンプふゆこ

猿の記録映画を見たことがある。動物園という限られた空間で、母親を失った子猿を育てた記録である。生まれたばかりの子猿に飼育員が哺乳ビンでミルクを飲ませ、おしめをして人間の赤子のように育てた。食事も排泄も自分でできるようになると、子猿は檻の中で、毛皮をはった木を母代りに、いろいろの行動実験をされるのである。おどろかされると、子猿は母代りの木にしがみつく。

いろいろの実験はさておき、私の心を強くとらえたのは、映画の最後の部分であった。自身が母となったその猿は、自分の子猿を抱こうとはしないのである。か弱い子猿が懸命に母に抱きつきに来るたびに、その母猿は子猿をまるでゴミのようにつまんでは床に投げる。母を求めてキイキイと泣く子猿の姿はまことに哀れであった。母猿の生い立ちを知っている我々には、彼女を憎む訳にもいかない。あの記録映画が私の教育観を決定的にしたように思う。

あの特別な一例を取り上げて自然の法則だなどと断定する気はないのだが、自身が母となって、私の母がした通りのことを私も自分の子にしているのに気づいてはっとすることがある。幸い私の母は、いろいろの欠点はあったろうが、ひとつの大切なことを教えてくれた。それは、彼女が私に幸せであってくれと切に願ってくれたことである。考えてみればあたりまえの事なのだが、私が幸せになるのを切に願ってくれる人がこの世に一人でも存在したということは、何と有難いことであろうか。それが私に対する絶対的信頼という形で表現されたので、どんな苦境に会っても、母を喜ばすには幸せにならなければとがんばることになる。

オランダは九州程の小国である。かつての植民地インドネシア人やスリナム人を大量に同化し、モロッコ人、トルコ人、ユーゴスラビア人等の出稼ぎ家族

をひきとり、ベトナム難民を受け入れ、スリランカ、南アフリカ、イラク、その他世界中からの亡命者たちが入国を待っている。都会の学校はさながら国際学校のようであり、差別などしていられないくらいだ。もちろん「ない」と言っては間違いになるのだが、子供達はどんな人種とも、どんな異文化とも、くったくなくすぐ交う。差別をする子供達は何と無邪気に親や囲りの大人の話をうけ売りしていることか。差別される側も同じである。不必要に身がまえる子供達の親は、きっと苦い思い出を抱いているに違いない。

子供達は、親を、社会を真似して育っていくものだと、つくづく思う。働きバチの父親不在の家庭で、どんな未来の父親が育っていくというのだろう。又オランダのように離婚離婚の社会で、どんな人間不信の人間が育っていくことだろう。人間改革社会改革する努力を怠って未来を子に託す、そんな虫の良い教育が成功するはずがない。子供を「教育」する前に、子供達が安心して親を、教育者を、社会を信頼し真似して育っていけるようにと切に思う。

私はこの原稿を、湾岸戦争ぼっ発直後に書いている。戦渦の中に生まれ、恐怖と憎しみに育った子供達は、成長してどんな子を、どんな国を育てていくことだろうか。

核を生む心は核でも滅ぼせずと知りてなお投げむ一塊(かい)の石

（歌人・アムステルダム補習校）